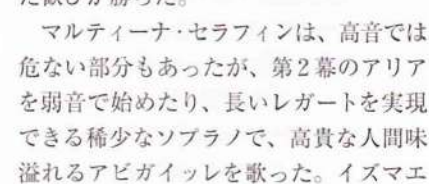
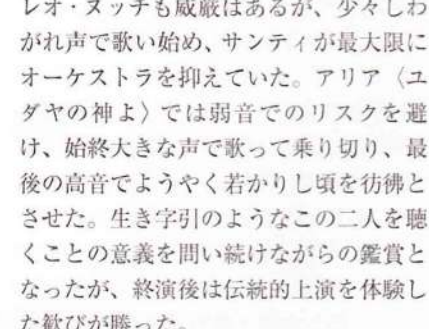
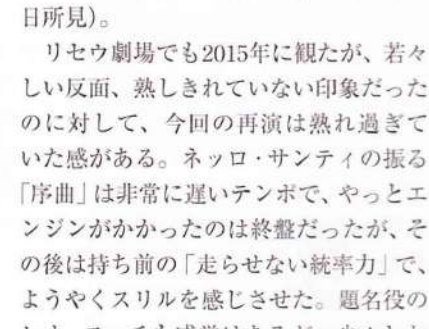
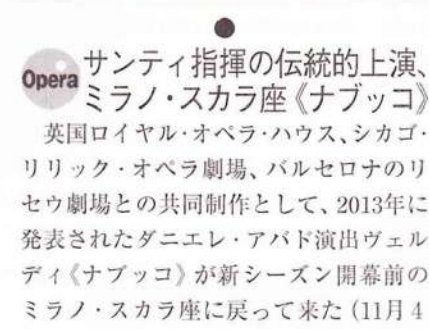
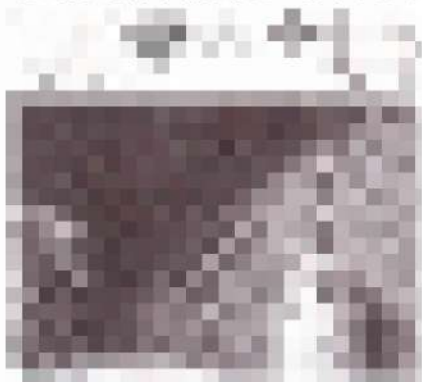


Scramble Shot



ーレのステファノ・ラ・コッラ、フェネーナのアンナリーザ・ストロヴァも合格点。

アバドの演出はそれぞれの歌劇場をまわるうちに成熟したようで、特にスカラ座合唱団他の熟演もあり、劇的效果が上がっていたが、そろそろ次のナブッコ新演出が待たれる。(中東生)



2013年、3つのオペラ座の共同制作だったダニエレ・アバドの演出による《ナブッコ》。今回のミラノ・スカラ座では、サンティとヌッチが「伝統的」な上演を行った

Opera サンティ指揮の伝統的上演、ミラノ・スカラ座《ナブッコ》

英国ロイヤル・オペラ・ハウス、シカゴ・リリック・オペラ劇場、バルセロナのリセウ劇場との共同制作として、2013年に発表されたダニエレ・アバド演出ヴェルディ《ナブッコ》が新シーズン開幕前のミラノ・スカラ座に戻って来た(11月4日所見)。

リセウ劇場でも2015年に観たが、若々しい反面、熟しきれていない印象だったのに対して、今回の再演は熟れ過ぎていた感がある。ネッロ・サンティの振る「序曲」は非常に遅いテンポで、やっとエンジンがかかったのは終盤だったが、その後は持ち前の「走らせない統率力」で、ようやくスリルを感じさせた。題名役のレオ・ヌッチも威厳はあるが、少々しわがれ声で歌い始め、サンティが最大限にオーケストラを抑えていた。アリア〈ユダヤの神よ〉では弱音でのリスクを避け、始終大きな声で歌って乗り切り、最後の高音でようやく若かりし頃を彷彿とさせた。生き字引のようなこの二人を聴くことの意義を問い続けながらの鑑賞となったが、終演後は伝統的上演を体験した欲びが勝った。

マルティーナ・セラフィンは、高音では危ない部分もあったが、第2幕のアリアを弱音で始めたり、長いレガートを実現できる稀少なソプラノで、高貴な人間味溢れるアビガイッレを歌った。イズマエ